

高崎 027-322-1161	富岡 0274-62-1555
崎生 0277-43-2349	太田 0276-60-3560
桐伊勢崎 0270-25-3550	川中 0279-24-7630
沼田 0278-22-3231	安中 027-381-0131

四季を感じるホテル

水上ホテル 聚楽

〒379-1617 群馬県利根郡みなかみ町湯原665

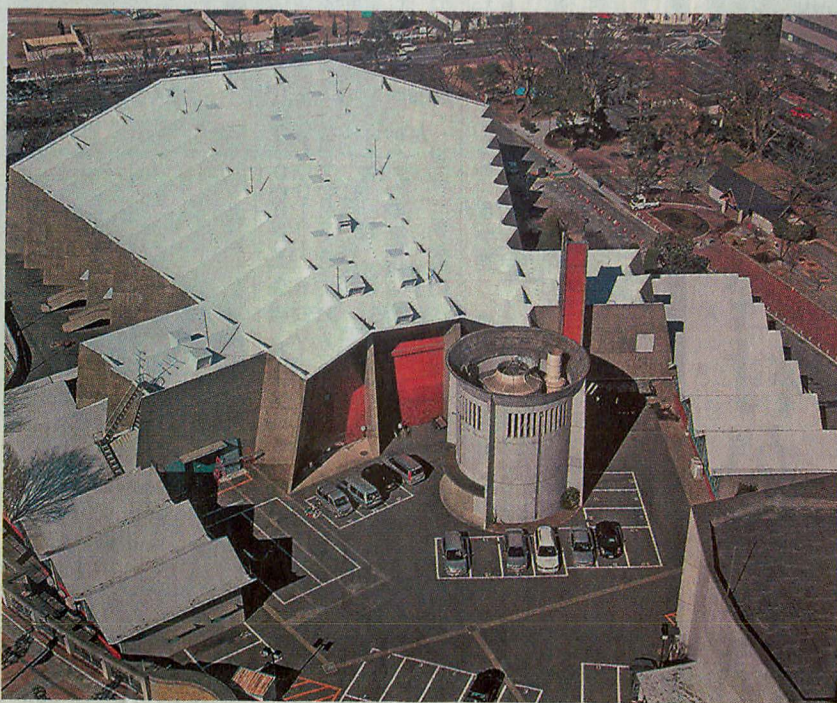
☎0278-72-2521

■URL <http://www.hotel-juraku.co.jp/minakami/>

群馬

建替え含む検討に異論

群馬音楽センター整備



■音響に問題
九六一年に建設された傑作の一つ。市役所近くに建てられ、総工費の一部が市民や企業から寄付で賄われた。ユニークな屋根のデザインなどが評価され、「近代建築文化財に指定されている。にも選出されている。」

群馬音楽センターは、一九六一年に建設された傑作の一つ。市役所近くに建てられ、総工費の一部が市民や企業から寄付で賄われた。ユニークな屋根のデザインなどが評価され、「近代建築文化財に指定されている。にも選出されている。」

世界的建築家レーモンド設計

高崎市が、市のシンボル「群馬音楽センター」の建て替えを含めた整備を検討していることに対し、市民や有識者から異論が噴出している。同センターは、世界的建築家アントニン・レーモンド（一八八八―一九七六年）が設計。

各地ではレーモンドも出ており、建築物も起きている。同センターから市美術館で「関係者からは「矛盾している。」

ただ、耐震性に問題はないが、最近では老朽化が目立っている。同センターを拠点とする、群馬交響楽団の根岸富士夫常務理事は「団員から音響に不満の声が出ており、客からは空調の不備などでクレームもある。抜本的な整備を」と音楽関係者の意見を代弁する。

■つづすべきだ
高崎市はこうした意見を踏まえ、二〇〇六年に幹部らによる「新芸術文化ホール建設検討会」を発足させた。文化課によると、現在までに①建て替える②大規模に改修する③保存して別の場所に別の建物を建てるなどの案が出ている。

同市は三案とも多額の事業費が必要のため、合併特例債を充てたい考え。特別債の使用期限を考慮すると、一〇年度ごろをめどに基本構想を策定する必要がある。現在は幅広く議論する段階を迎えている。

このため、同市が主催して今年一月に群馬音楽センターをテーマにしたシンポジウムを開催。パネリストは音楽関係者が占め、一人から「(建物を)つづすべきた。残しても維持費などが掛かり、一般企業では「いらぬものはやめろ」と言われている」などの持論も飛び出した。文化課によると、建て替えに賛成する意見が多かったという。

ところが、パネリストに建築関係者が入っていないことが疑問視する声が続出している。

野町隆宏文化課長は、「慎重に考えているが、建て替えは選択肢の一つではある。建築家を招いたシンポジウムは今のところ予定はない」と説明。

「音響の問題は天井の低さなどが原因のため、屋根を壊さなければならぬのでは。改修しても音響の問題が解決するという保証がない。別の建物を建てる」と、箱モノ行政への批判が出るのではないかと、改修案などに否定的な見方も示している。

市重要建築物指定や企画展開催と矛盾

■高崎が死ぬ
こうした高崎市の現状に、東京芸術大建築科を卒業してレーモンドの高弟となり、群馬音楽センターの建築に携わった建築家の三沢浩さん(東京都)は、深く憂慮する。

「高崎市は、市美術館で四月からレーモンドの(生誕百二十周年を記念した)企画展を開くというのに、けしからん話だ。シンポジウムにしても、建築関係者を入れないとは納得できない。改修の検討を十分にしておいて、建て替えというならば(反対運動など)市民の盛り上がり期待する」

レーモンドが設計した、高崎市の「高崎哲学堂」の保存運動にかかわった財団法人・高崎哲学堂の熊倉浩靖常務理事も、高崎市民である自身の立場も含め、強く反発する。

「建て替えは、高崎の歴史と文化を破壊する乱暴な意見で、実行されれば『高崎が死ぬ』と言っても過言ではない。音楽センターは戦後の日本、そして日米関係、市民運動をも象徴する現代遺産だ。仮に建て替える方向ならば(反対運動で)受けて立たざるを得ない」

高崎市の一級建築士中山敏雄さん(66)も「音楽センターは、建築士を目指していた大学時代に建てられただけに、思い出深い。貴重な文化遺産として残すべきだ」と建て替えに反対している。

このまま同センターの建て替えが有力になれば、反対運動に発展する可能性が高まっている。

■反対運動も
しかも、レーモンドの建築物をめぐる議論は、各地でも相次いでいる。レーモンドは日米などで計五百件以上の建築物を残したとき、現在では多くが老朽化を迎えているためだ。

横浜市中区では、レーモンド建築の「旧本牧スタンダード石油社宅」が解体の危機に。地域住民が約二千四百人分の署名を集めるなど、強い反対運動を展開したが、民間企業が土地を所有するため、最終的に解体された。

中でも代表的なのは、東京女子大(東京都)のケースタ。同大では、レーモンド建築の七棟が登録有形文化財に指定されている。しかし、大学側が同じレーモンド建築でも、指定されなかった「旧東寮」と体育館の解体を決定した。

これに対し、卒業生らが反対する「東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会」を組織。メンバーに作家の永井路子さんや瀬戸内寂聴さん、大学教授、文化人らが名を連ねた。運動は地域住民にも拡大し、反対署名は約一万二千人分に達している。

しかし、大学側は昨夏に旧東寮の解体を強行。同会代表を務めるジャーナリスト・藤原房子さん(東京都)は、こう指摘する。

「(群馬音楽センターの建て替えを含む検討)あきれた、ひどい話だ。高崎でレーモンドの企画展を開くと聞いているが、矛盾している。全国的に近代建築が危機を迎えているが、高崎は一つの参考事例として注目される。今後は、各地が連携した取り組みが必要になるのかもしれない」